説教要旨『いつまでも残るもの』

ルカによる福音書　２章２２～３８節

老齢のシメオンとアンナは、マリアとヨセフが神殿に連れてきた幼子イエスを見て、救いを見出します。連日、人が出入りしていたであろう神殿の中から、一人の、しかも幼子のなかに、全ての人のための救いを見出すのでした。アンナは、若いときに嫁いで７年間夫と共に暮らしていましたが、夫と死に別れます。今日まで一緒に暮らしていた親しい者の命、安定した暮らしが、ある日突然失われてしまう、そんな現実の只中に私達も置かれていることを、アンナの境遇は教えてくれているように感じます。二人は、長い年月を生きるなかで、様々なものが栄えては過ぎ去り衰えていく現実を、その目で見てきたのだろうと想像致します。しかしだからこそ、何が人間にとって本当に大切なことなのか、どこに救いや希望があるのかを見出すことができたのだとも言えます。

韓国の歌手ヤン・ヒウン氏が作詞した『人生の贈り物』という曲があります。季節の花がこれほどに美しいこと、美しく老いていくことがどれ程に難しいかということ、かといって若き日のときめきや迷いを、もう一度繰り返すことはもう望むものではなくなったこと、迷った分だけ深く慈しめる夕日を何も言わず、頷きながら一緒に座って眺めてくれる友がどれほどかけがえのない人生の贈り物であるのかということ…「歳を取るまで、少しも気づかなかった」と歌われます。若い世代にとって、人生の先輩方との出会いは、ある意味、未来を垣間見させて頂く経験でもあると思います。喜びにしろ、悲しみにしろ、「歳を取るまで気づけないことがある」、そのような先輩方の言葉や歩みは、現状に大きく揺れ動かされていく若い世代にとって、簡単に諦めることも達観することもできない未来への緊張感や希望を、人生の深みを知ることへの憧れを抱かせて頂くようにも感じます。

シメオンが幼子イエスに見出した救いは、人間にとって都合の良いものばかりではありません。イエスのもたらすものは、時に「多くの人を倒したり」、「剣で心を刺し抜かれ」るような経験でもあることが示されます。しかし、そのことで初めて「多くの人の心にある思いがあらわにされ」、何が本当に大切なことで、どこに救いがあるのかが深く問われ始めるのだと思います。そしてその救いは、イエスに見出せるのだということを、人生の先輩である二人が教えてくれています。そして今、こうして、酸いも甘いも経験して来られた人生の先輩方が礼拝に集い、神を賛美しておられる…この事実こそ、若い世代の、この世の希望を証しているのではないでしょうか。「今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきりと知ることになる。…信仰と、希望と、愛、この三つはいつまでも残る」（Ｉコリント 13:13）のだと。

（文責：望月達朗牧師）